

一八一—九世紀轉換期のウィッグと非国教徒

——ホランド・ハウスの人々——

川 分 圭 子

【要約】 イギリスで非国教徒の政治的な地位が保証されるようになるのは、一八二八年の審査法・自治体法廃止以降のことである。これ以前、非国教徒はその政治上の立場の不安定さ故に体制批判的な政治行動をとる傾向を持ち、議会改革運動やアメリカ独立支持、奴隷貿易廃止運動等で活躍した。中でも合理主義的非国教徒と呼ばれる信仰グループは、一八世紀後半から一九世紀初頭にかけての急進主義的思想・運動において極めて顕著な存在である。彼らは裕福で教養ある商人や製造業者からなっていたが、フランス革命勃発以降イギリスの世論が急速に保守化する中でも体制批判の姿勢を変えず、その急進主義的な言動はしばしば取締りの対象となった。しかし、この合理主義的非国教徒は非常に少数でしかも上層の階級に属していたため、イギリスの自由主義・急進主義運動上彼らは重要でないとする研究者が多い。だが本稿では、その多くが有権者であった合理主義的非国教徒が一八世紀後半以降のウィッグ、特にフランス革命勃発以降のフォックス派にとって欠かすことのできない支持勢力であったこと、また彼らとウィッグの政治家の交流はフォックスの後継のホランド卿の時代には個人的な友情や婚姻関係にまで発展していたことを明らかにした。合理主義的非国教徒は、その政治信念を政治家に直接反映し得る場を獲得していたのである。 史林 七六巻三号 一九九三年五月

一 はじめに

一九世紀初頭の自由主義改革以前のイギリスにおいて、審査法、自治体法、あるいは結婚法や埋葬法等によって、非国教徒の政治活動や社会生活が一定の制限を受けていたことは、よく知られている。しかし、非国教徒が実際被っていた不利益の量や、それにより生じた彼らの社会集団としての特殊性を、正確に査定することは困難な問題である。

そもそも彼らはどれくらいいたのだろうか。プロテスタント非国教徒の場合、その総数は一八世紀を通してだいたい三〇万余りと推定されており、比率でいえばイングランドの全人口の五〜六%に達していた^①。彼らは法律上は国政、地方行政における選挙権と被選挙権をもたず、政治関与の機会を封じられていた。しかし信仰は個人の内面の問題であり、誰が非国教徒かを特定することはそれほど簡単ではなかった。このため一八世紀には便宜的国教遵奉が普及し、公職につくにあたって課せられていた信仰告白は、非国教徒の政治・行政参加への真の障壁ではなくなっていたという主張もよく聞かれる^②。実際多くの都市で非国教徒が自治体の要職を占めており、マンチェスターやハルのように地方行政が完全に非国教徒によって掌握されていた都市もあった^③。また商業、産業都市では非国教徒の人口比率は二、三割を超える場合もまれではなかった^④。

しかし、こうした非国教徒の実力の上昇を示す報告のある一方、結婚や埋葬、教育等の社会生活の多方面で彼らが困難を味わっていたこともよく知られている^⑤。また、便宜的国教遵奉が進んでいたとはいえ、国会において非国教徒の議員はやはり少なかった。例えば、一七五四—九〇年の間に選出された一九六四名の下院議員中、わずか一九名が非国教徒であるにすぎない^⑥。非国教徒は人口比率にして少なくとも五%はいたのだから、この数値は非国教徒の国政進出の困難を物語っているといえるだろう。また地方行政においても、役職に指名されながら信仰告白の宣誓を拒否した者は多数存在した^⑦。このように非国教徒の政治、社会生活の実態はいまだに明確にされていず、この点はより深く探求されなければならぬ。しかし非国教徒が多少とも政治的社会的不利益のもとにあり、潜在的に政治関心を深める傾向をもっていたことは確かである。一八世紀を通して、非国教徒は審査法・自治体法廃止を求めて圧力団体を形成する。またこれだけでなく、彼らの多くは奴隷貿易廃止、議会改革、アメリカ独立の際の戦争反対等の体制批判を展開したのである。

こうした事情から、イギリス政治における非国教徒の存在の意味の解明は、イギリス史研究者にとって常に課題となってきた。特に、一八世紀後半多くの非国教徒が様々な改革運動に関わったことから、非国教徒と自由主義・急進主義の関

わりを考察する研究は実に豊富となっている。また一八世紀後半以降改革支持の中心勢力となったウィッグと非国教徒の関係もまた、同じ問題関心から問われ続けている。

そこで本稿では、このようなイギリス本国での研究事情の整理を行い、次に一八世紀から一九世紀初頭の非国教徒の状況を説明することにした。その上で、同時期の非国教徒の政治行動について課題を絞って論ずることとする。^⑧

- ① A. D. Gilbert, *Religion and Society in Industrial England. Church, Chapel and Social Change 1740-1914*, London, 1976, p. 16.
- J. C. D. Clark, *English Society 1683-1832. Ideology, Social Structure and Political Practice during the Ancien Regime*, Cambridge, 1985, p. 376.
- ② Roy Porter, *English Society in the Eighteenth Century*, 2nd ed., London, 1990 (1st Published in 1982), p. 171.
- ③ John Seed, "Gentlemen Dissenters: The Social and Political Meanings of Rational Dissent in the 1770s and 1780s", *The Historical Journal* 28-2 (1985), pp. 303, 307. 以下の論文は一八世紀前半から非国教勢力が市参事会の一つの派閥となっていたことを示す。近藤和彦「宗派抗争の時代——一七二〇、三〇年代のマンチェスターにおける対抗の構図——」『史学雑誌』九七—三、一九八八年。
- ④ John A. Phillips, *Electoral Behavior in Unreformed England. Plumbers, Splitters, and Straights*, Princeton, 1982, p. 160. Porter, *op. cit.*, p. 180.
- ⑤ Bernard Lord Manning, *The Protestant Dissenting Deputies*, Cambridge, 1952, pp. 254-332, 372-384.
- ⑥ G. M. Ditchfield, "The Parliamentary Struggle over the Repeal of the Test and Corporation Acts, 1787-1790", *English Historical Review* 89 (July 1974), p. 551.
- ⑦ Manning, *op. cit.*, pp. 119-129.
- ⑧ なお本論で非国教徒という場合、主として新教非国教徒をさすものとして使う。

二 研究 史

一九八五年、J・C・D・クラークの『イギリス社会 一六八八—一八三二、旧体制におけるイデオロギー、社会構造と政治的実践』が刊行された。^①同書は、一八世紀政治における宗教的局面について、過去の豊富な研究を消化した上で多くの論点を提出した最新の研究であるので、本論ではこの著書の論点を中心に研究史の整理を行うこととする。

クラークは、一八世紀のイギリスの政治体制が国教会と国家の相互依存に基づいたもの、即ち教会国家体制ともいふべ

きものであったと述べている。もちろん一八世紀前半のウィッグ支配の時期には、当然ながら名誉革命体制維持の支柱として国教会は欠かせなかった。が、クラークによれば、トリー復活後の世紀後半には、王制の起源を契約ではなく神の啓示に求め、国王への受動的服従をキリスト教徒の義務として抵抗権を最小限に解釈する高教会派の政治思想を取り入れることで、イギリスのエスタブリッシュメントはその国教主義をさらに強化したという^②。

逆に、体制批判的な政治思想は非国教徒の中で育てられた。世紀前半には寛容法によって擁護されていると考えていた非国教徒は、次第にこれの義務化する信仰告白によって良心の自由を侵害されていると感じるようになった。特にこれはヘテロドクシ (heterodoxy、非正統派信仰、オールドドクシ orthodoxy の反意語として以後用いる) の非国教徒の場合においてそうであった^③。寛容法の保護の対象は正統派信仰のみであったからである。こうして世紀後半には、ヘテロドクシの牧師リチャード・ブライス、ジョセフ・プリーストリなどは、人間の自由意志と個人の自治を重視する教義上の立場やロックの社会契約論の影響から、神授権の明確な否定と人民の国政選択の重視という政治思想を形成した。また、当時の政治改革運動の旗手だったジョン・ウィルクス、クリストファ・ワイヴィルは信仰上ヘテロドクシに共感を持っていたし、一七八〇年のウェストミンスター集会の議会改革要求決議の指導者はほとんどがユニテリアンであった。クラークは以上のように指摘して、一八世紀後半のラディカルな政治思想と運動はヘテロドクシの宗教思想を源泉していると主張する^④。

このクラークの主張は、三つのポイントに段階的に分けることができる。それは、第一に一八世紀の社会においては宗教が一つの支配的要素であったという大前提、次に体制批判には当時社会的にも政治的にも不利益扱いを受けていた非国教徒が大きく貢献したという認識、第三に非国教の中でも特にヘテロドクシの宗教思想が一八世紀ラディカリズムをはぐくんだという見解である。

現在イギリス史研究では、国王・貴族・国教という伝統的要素は近代に入ってから長期間支配力を持続したという見解が大勢をしめている^⑤。クラークの第一の主張は、おおまかにはこのような学界の流れにそったものであり、その意味で

基本的には承認されていると言えよう。ただし、社会全般において宗教が強い影響力を持ち続けたとするクラークの論調には反論があることは、認識しておかなければならない。例えばロイ・ポーターは、教会出席率の急激な低下や理神論などの流行を理由として、一八世紀は著しく宗教的感情が薄れた時代であると述べるのである。^⑥

しかしポーターも、当時の政治への教会の影響力は過小評価できないという点ではクラークの見解を支持している。^⑦ 近年の幾つかの実証研究がこの傾向を支持する結果に終わったことは、より重要であろう。まず、J・A・フィリップスの投票行動分析は、幾つかの選挙区では宗派が政治行動の決定要因であったことを証明した。^⑧ またJ・E・ブラドリも近著の中で、アメリカ独立期の誓願書の分析を通して、非国教徒が政府のアメリカ政策に一貫した態度をとったことを示した。^⑨ このように、一八世紀では宗教が人々の政治行動を決定する要因の一つであったことは、現在実証済みといってよい。

それでは、非国教徒が改革支持勢力であったとするクラークの二点目の指摘についてはどのような意見が提出されているだろうか。

実は、この解釈は非常に伝統的なものである。一九世紀以来ウィッグ史家は、一八世紀後半に自由主義改革支持を表明し始めたウィッグが、同じ主張を掲げる非国教徒の院外勢力と同盟したと考えていた。^⑩ また今世紀においてもアンソニン・リンカン、カロライン・ロビンズらの研究が、アメリカ独立や奴隷貿易問題を巡る政府の政策批判において非国教徒が際だった存在であったことを明らかにしている。^⑪

しかし一方でこの解釈を批判する研究者は現在も多い。^⑫ まず非国教徒とウィッグの政治的同盟関係の解釈が、果して自由主義改革支持や体制批判という枠組みで理解できるのかどうかが問題とされる。ウィッグ史家は、ウィッグが腐敗政権であった一八世紀前半については非国教徒とウィッグの同盟関係はなく、世紀後半においてのみ両者が結んで自由主義改革を支持したと説明したが、現在では、世紀前半においても非国教徒がウィッグ政権を支持したことが知られている。この結果フランク・オゴーマンは、腐敗に満ちたウィッグ政権を支持した非国教徒は、常に改革派とはいえないという。^⑬

しかし、一八世紀前半の非国教徒のウィッグ支持に関しては全く別な説明が与えられよう。この時期においてはジャコバイトとトリーを同一視する風潮がまだまだ濃厚であり、このため新教徒の非国教徒としては名譽革命体制維持を明確に標榜するウィッグを支持する選択肢のみが残っていたのである。だからこれをもって、非国教徒が当時の政治的腐敗を肯定していたとすることはできない。そして世紀後半に関しては、自由主義改革支持＝ウィッグ＝非国教徒という公式は、多くの例外や問題点を含みながらも、一応は成立すると思われる。

また、経済改革を重視する場合非国教徒は改革に不熱心であったとする声がある。例えばオゴーマンやイアン・R・クリステイは彼らが一七七九―八五年の経済改革運動中沈黙を守っていたと指摘する^⑩。しかし、非国教徒とラディカリズムの関係を重視する立場の研究者は、経済改革には触れず、専ら対アメリカ戦争反対、審査法・自治体法廃止、奴隸貿易廃止、議会改革といった政治課題に対する支持について調査している。従って経済問題を除けば、非国教徒が改革支持勢力の重要な部分を占めていたという主張は、信じるに値するものといえるであろう。

だが、最も強力な批判は、非国教徒の数は非常に少なくしかも一八世紀を通して減少していることで、その影響力を過大に評価することはできないこと、またその多くが豊かなブルジョワであったのでそのような非国教徒が急進的改革運動に関わったとは考えにくいとする意見であろう。ロイ・ポーターはこのように述べた後、一七八〇年代以前においては非国教徒の改革への熱意は過大評価されてはならないし、またそれ以後でも政治的ラディカリズムへの潜在性を示したのはごく一部の「熱っぽい少数派」だけだったという^⑪。またジョン・ブルーワーは、以前の研究が非国教徒と自由主義の関連性を主張する上で好んで取り上げてきたブリストリやプライス等の思想家は、とても非国教徒全体に影響を与えたとは言い難いと述べて、非国教徒のラディカリズムへの貢献ははるかに小さいものであったと主張している^⑫。

しかし、実際にはこの批判者達とクラークの見解は一つの共通項をもつ。すなわち、ポーターが「熱っぽい少数派」と称した人々、つまりブリストリ、プライスらの信仰グループの扱いは同じなのである。両者とも、彼らに代表されるラ

ディカルな宗教思想の持ち主からより深化された政治改革の思想が出現したこと、また一七七〇、八〇年代に政治改革を支持した人々の多くがヘテロドクシの非国教徒または広教会派国教徒であったことは、認めている。判断がわかれているのは、彼らの影響力を重視すべきかどうかなのである。

この問題はクラークの主張の最後の点、ヘテロドクシをラディカリズム思想の源泉と見なす判断とも関わっている。というのは、プライズやプリーストリ達は合理主義的非国教徒という当時の代表的なヘテロドクシの信仰グループに属していたからである。通常、この合理主義信仰は一八世紀末には福音主義の隆盛の中で衰退期に向かったと理解されている。事実一八〇〇年頃には彼らは非国教徒全体の二〇分の一に過ぎなかった。¹⁷ また彼らは、非国教徒の中でも特に富裕で知的な人々からなっていた。¹⁸ 確かに、このような人々が、体制批判やラディカリズムの政治活動に大きな貢献をしたとは考えにくいかもしれない。

しかし現実には、一八一—九世紀転換期の政治改革の思想や運動に、少数であるはずの合理主義的非国教徒の名を多く見いだすことができるのである。このことから、合理主義的非国教徒は総数は少なかったとしても、高度な政治的関心と行動力を持った人々が高率に存在した集団であったと考えられるのではないか。彼らは財産家であったから、有権者として政治家に圧力をかけることができ、また教養が深かったので、当時の政治を知的に分析し改革を提言することができた。このように考える可能性のある限り、少数かつ富裕であるからといって合理主義的非国教徒の影響力が小さかったと断定することは間違っているよう。

後でみるように、合理主義的非国教徒は工業化以降に経済力を蓄えた商人や製造業者からなっていた。従って、ブルーワーのように主として職人層等下層中産階級の政治行動に重要性を見いだそうとする立場にとっては、合理主義的非国教徒は重要な存在ではないかもしれない。しかし、一八世紀から一九世紀初頭という時代は、経済的には十分豊かであった上層中産階級にしても政治力を掌握していない時期である。それ故、この時期においては上層中産階級の政治力獲得の過

程にこそ丁寧な検討がなされなければならないと思われる。合理主義的非国教徒の政治活動の分析は、この研究課題に一つの解答を与えられるものである。

以下本稿では、当時の上層中産階級の一つの思想的潮流を代表するものとして合理主義的非国教徒を取り上げ、その政治行動のあり方を調査する。ただし、合理主義的非国教徒については日本ではほとんど紹介がないので、次章を彼らの説明にまかすこととする。

- ① Clark, *op. cit.* この研究について本稿に特に上をいふ議論や
“多への反響が寄せられたところの” “その主なものを以下にあげよう”
へ。 Joanna Innes, “Jonathan Clark, Social History and Eng-
land’s “Ancien Regime””, *Past & Present* 115 (1987). Jeremy
Black, “England’s “Ancien Regime”?”, *History Today* 38(1988).
- ② Clark *op. cit.*, chapter 3, 4.
- ③ Manning, *op. cit.*, p. 53.
- ④ Clark, *op. cit.*, chapter 5.
- ⑤ “The English Aristocracy” J. V. Beckett, *The Aristocracy in Eng-
land, 1660-1914*, Oxford, 1986. Ian R. Christie, *War and Revo-
lutions. Britain 1760-1815*, London, 1982. 348-90°
- ⑥ Porter, *op. cit.*, pp. 168-172. 464° id., “English Society in the
Eighteenth Century Revisited”, in Jeremy Black ed., *British
Politics and Society from Walpole to Pitt 1742-1789*, London,
1990, p. 35 464°
- ⑦ *Ibid.*, p. 32.
- ⑧ J. A. Phillips, *op. cit.*
- ⑨ James E. Bradley, *Religion, Revolution, and English Radicalism.
Nonconformity in Eighteenth-Century Politics and Society*, Cam-
bridge, 1990.
- ⑩ 例えばヘンリー・マニングは「警戒を怠らぬ自由の擁護者
“ホイッグ” 政府批判者“エドワード” G. M. Trevelyan, *History of
England*, London, 1926, p. 451.
- ⑪ Anthony Lincoln, *Some Political and Social Ideas of English
Dissent, 1763-1800*, Cambridge, 1938. Caroline Robbins, *The Eigh-
teenth Century Commonwealthman*, New York, 1959.
- ⑫ “この点で國々を比較する” “以下に論文を整理する批判
をあげる” James E. Bradley, “Whigs and Nonconformists:
Slumbering Radicalism in English Politics, 1739-89”, *Eighteenth
Century Studies* 9-1 (1975), pp. 5-15.
- ⑬ Frank O’Gorman, *Voters, Patrons and Parties. The Unreformed
Electorate of Hanoverian England, 1734-1832*, Oxford, 1989, pp.
359-60.
- ⑭ *Ibid.*, p. 360. I. R. Christie, *Writings, Weyhill, and Reform*, Lon-
don, 1962, p. 229.
- ⑮ Porter, *op. cit.*, pp. 179-181.
- ⑯ John Brewer, “English Radicalism in the Age of George III”,
in J. G. A. Pocock ed., *Three British Revolutions: 1641, 1688,*

1776, Princeton, 1980, pp. 342-3.

⑪ Christie, *War and Revolutions*, p. 38.

⑫ Seed, *op. cit.*

三 合理主義的非国教徒

(一) 合理主義的非国教徒

名譽革命体制下で国教から排除されたプロテスタントの会派は、長老派、洗礼派、会衆派とクエーカーであり、このうち前三会派を旧非国教徒 *old dissent* と呼ぶ。^① しかし一八世紀後半にはこの古い分類は実体と合わないものとなっていた。かわって福音主義と合理主義信仰という二つの潮流によって新たな信仰の境界線が引かれていく。

三会派のうち特に合理主義信仰に傾斜したのは長老派であった。^② 会衆派とは異なって、長老派は自分達の礼拝堂の使用を神の恩寵を予定された人々の特別な集まりにのみ限るという考えを、好まなかった。彼らの礼拝堂は、プロテスタント一般に使用が許可されている場合が多い。また礼拝は全ての来訪者に解放されていた。このような習慣が長老派に教義の純粋性を失わせたといわれる。^③

また、元來長老派はアルミニウス主義の傾向が強く、その意味で国教よりであった。^④ 一八世紀中葉の長老派牧師、ジョージ・ベンソン George Benson は以下のように述べている。「人々の何の欠点とも関係なく、また彼らが何の悪も犯さない前から、神が人々に永遠の死や破滅を宣告できると仮定してみよう。そんな概念は常識にとってショックであり、また公平の原理に反しているではないか。それは人間にとって不愉快でいまいましいのと同様、神にとっても不名誉な概念なのだ。」これは陰鬱なカルヴェンの予定説に対する明確な反対表明であった。^⑤

また当時長老派の信徒達向けに書かれた教義問答の序文では、「あなたがたの子供達に、宗教がセクト的偏狭や退屈な意見や実りなき信仰よりも、高貴なものであることを知らしめよ。宗教とは、魂に神のイメージを持つことであり、公正、

親切、慈善において神に似ることである。」とされている。^⑥ この道徳重視の姿勢もカルヴィン派からの脱却であった。

また彼らは、突き詰めた合理主義から原罪思想の否定に至る。「もし我々が、その性質において野獣以下であり、またこの教理（原罪の教理）がそう述べていると信じるならば、何をもって我々が野獣以下の行いをしていると判断するのか。」^⑦ こうして、長老派はオーソドクシの論理構造を理性重視の観点から疑い、キリストの神性、地獄や悪魔の存在、聖母マリアの処女懐妊などを否定した。^⑧

彼らは聖書の無誤謬性を信じあくまで啓示宗教にとどまる点で理神論者ではない。だが理神論に対抗する必要上聖書の合理的解釈を追究した結果、長老派はソツツイニの影響を強く受けこの反三位一体の教説に深く関わることとなった。^⑨

一八世紀中葉までに、長老派の正統的カルヴィニズムからの離反は完了しつつあった。この傾向は都市、特にロンドンで顕著だった。一七三二年のロンドンの調査では、会衆派の牧師のほぼ全員が純粋なカルヴィニストとされたのに対し、長老派の牧師四人中二五名にアルミニウスの傾向を認めている。また残り一九名の長老派牧師のうち、八名が一七五一年までに死亡したが、その継承者は全てアルミニウス派であった。^⑩

このような牧師を育成したディセンティング・アカデミーの多くで、ロックの著作が規定図書とされ、また一部のアカデミーは、ニュートンの数学等自然科学をカリキュラムに取り入れた。^⑪ これらの影響下でアカデミーの反三位一体の傾向はさらに進展した。世紀中葉までのアカデミーではいろいろな宗派の学生を同時に受け入れていたので、その教育の結果会衆派出身の学生がヘテロドクシとなることも多く、そのため彼らが牧師となった後正統派カルヴィニズムの説教を期待する会衆と摩擦を生じる場合も多々見られたのである。正統派カルヴィニズムから離脱した会衆派牧師が、長老派に転向することも多くなってきた。^⑫

当時の長老派の説教は、ロックやミルトンの他ソクラテスなども登場する知的なものであったが、熱情を排する余り退屈であった。^⑬ また日常生活のための実践道徳が説教の中心で、救済の予定等の教説に終始する説教になれていた会衆を面

食らわせた。このような説教は牧師同様の教養を持った都市の上層中産階級には支持を得たけれども、全体的に不人気であった。後にブライスやブリストリも、会衆の減少に常に悩まされることとなる。^⑭

長老派の説教に飽きたらなかった人々は、もっと学術的でなく感情に訴える説教を求めた。正統的カルヴィニズムにとどまった非国教徒の多くは一八世紀後半には福音主義に接近する。一方で長老派は福音主義の熱狂を非難して、Rational Dissenter 合理主義的非国教徒と自称するようになる。^⑮

このような非国教徒の二分割の結果、洗礼派以外は非国教徒の会衆が一つしかないような小さい町では、両者が教会の建物の使用を巡って争う場面も見られた。このような係争では、非正統派の信者達が礼拝堂の使用権を維持し、正統派カルヴィニズムの人々が出て行くケースが圧倒的に多い。これは、礼拝堂の建物の管財人や牧師の給与の出資者になっていた町の富裕層の多くが、ヘテロドクシに傾いていたことを示している。^⑯

一八世紀後半には都市の商人、製造業者、専門職の人々はすでに非常に豊かであり、彼らにとっては祖先が信仰したビュリタンの禁欲は過去のものとなっていた。致富を奨励し日常生活での摂生を求める禁欲主義ではなく、すでに蓄積された富の享受を正当化してくれる現世肯定の宗教こそが、都市の上層中産階級の求めるものだったのである。合理主義信仰はこの要求に答えるものであった。たとえばブライスやブリストリの会衆では、ダンスやカード遊び、劇場通いも、程を得たものであれば肯定されていた。安息日の過ごし方にも厳格主義は存在しなかった。彼らにとって宗教は人間の本性に満足を与えるものであり、説教は日常の生活倫理が中心であった。地方の商業都市では富裕な会衆の寄付により、マホガニーの回廊や磨きぬかれた真ちゅうで飾られたぜいたくな礼拝堂が建設され、またこのような会衆達が集うリゾート地でもシーズン中合理主義信仰の説教が用意されたのである。^⑰

もちろん全てのの上層中産階級が合理主義的非国教徒となったわけではない。しかし合理主義信仰は、工業化の時代に経済力を獲得した都市の上層中産階級の一つの信仰形態であったということはできるだろう。

(11) ユニテリアン

一八世紀後半になると合理主義信仰は長老派の主流となった。一七五七年に設立されたワージントン・アカデミー *Warrington Academy* はまさに、この新しい思想的潮流の申し子であった。^⑮ 教官には、原罪の教義批判で知られたジョン・テイラーやジョン・エイキンがいた。そしてエイキンの後に古典と語学の教授として雇われたのが、ジョセフ・プリーストリであった。また急進主義改革運動に深く関わっていたギルバート・ウエイクフィールドもこの学校の最晩年に古典の教師として参加している。プリーストリは教授陣について、「私達はみんなアリウス主義者であり、我々が唯一異なる立場をとる重大な問題はキリストの贖罪の教理だけである。」と述べている。^⑯

当時のほとんどの学校が牧師一人によって経営され、牧師館に直接学生を寄宿させて授業するようなものであったのに対して、ワージントンは俗人の運営委員会が経営し、専用の教育棟や学生用宿舎を建設した近代的な学校であった。またここでは神学は必須科目ではなく、医・法・軍あるいは商業のキャリアむけにカリキュラムが用意され、俗人の学生を広く受け入れた。プリーストリはカリキュラム改正に着手した一人であり、自ら歴史や政治学、作文や演説等の自己表現、そして化学を教えている。現代語教育も開始され外人教師が招かれたが、興味深いことにこの中に将来フランス革命の指導者となったマラーがいる。いずれにしても、ワージントン・アカデミーは、はっきりと新興の上層中産階級の必要に焦点を絞った学校であった。

すでに進んでいた非国教徒の分裂の結果、長老派以外の非国教徒はほとんどワージントンに進学しなかったが、その一方でこの卒業生の多くが国教会の牧師となった。つまりワージントン・アカデミーは、合理主義的非国教徒と国教会の中でも特にアルミニウス主義的な広教会主義の人々の人的思想的交流を生み出す舞台であったのである。

広教会主義の運動が盛り上がりを見せたのは、一八世紀中葉以降のケンブリッジ大学においてであった。^⑰ この運動の中

心となったのは、当時ピーターハウス・カレッジの学寮長だったエドモンド・ロウとその友人、子弟達である。ロウは一部の教授からソツツィーニ主義に傾いているとして、学位取得の際に反対をうけている。このグループは、啓蒙の時代の公正・自由・進歩の思想に有害であるとして、大学内での、最終的には国教会内での三九箇条の信仰告白署名の廃止を求めている。ロウの友人フランシス・ブラックバーンが一七六六年『プロテスタントの教会における国教会の信仰と教理の告白の正当性、有用性と成功についての信仰告白による完全かつ自由な調査』を書くと、この機運は更に高まって、三九箇条署名から国教牧師を解放することを求めるフェザーズ・タヴァーン誓願 Feathers Tavern Petition が一七七二年下院に提出されたのである。署名人にはクリストファ・ワイヴィル、ギルバート・ウェイクフィールドのほか、ロウ門下のピーターハウス出身者であるジョン・ジェブ、ジョン・ディズニ、カベル・ロフトらがいた。

しかしこの運動は広範な支持を得たわけではなかった。国教内で別個の信仰覚醒運動を展開中のメソヂイストは反対を表明した。結局誓願署名者は国教会牧師一万二千人中の二百名にとどまり、下院でも二一七対七一の大差で誓願は破棄された。^④

これで国教会の合理主義化に失敗したと判断した署名者の多くは、このあと国教の聖職録を離れた。その一人セオファラス・リンゼイは、一七七四年ロンドンのエセックス・ストリートに自分の礼拝堂を開く。ここに彼はユニテリアンの名を公然と用い始めた。この教会には、彼の義父となっていたブラックバーンや彼同様国教の聖職録を離れた誓願署名者が集まり、その一方でプライス、ブリストリ等の合理主義的非国教徒、そのほかフランクリンなどの急進的知識人が出入りした。ここに、新たな広教会派知識人と合理主義的非国教徒の交流の場が生まれたのである。

瀆神行為等の処罰の対象だった反三位一体を公然と表明したリンゼイが処罰されなかったことは、長老派の名を隠れ蓑にしてきた合理主義的非国教徒に自信を与えた。加えて一七七九年、寛容令適用の条件として非国教徒牧師に課せられていた信仰告白への署名が廃止される処分がとられた。時期到来とみたブリストリは、合理主義的非国教徒の正式名称と

してやはりユニテリアンの名を採用した。^③ こうして、この名称はリンゼイとブリーストリの率いる信仰グループを表すものとなったのである。

彼らは宗教上だけでなく政治的にも自由主義を支持していた。従って彼らは基本的にウィッグを支持した。例えば一七六〇年代には、ロンドン近郊の合理主義的非国教徒の牧師や教師によって「高潔ウィッグクラブ Club of Honest Whigs」というクラブがつくられている。^④ 話題は政治と科学が中心であり、メンバーにはブライスのほかジェイムズ・バーグ、ブリーストリがいた。ここにはロンドン滞在中のフランクリンやジョサイア・キンジー Josiah Quincy Jr. といったアメリカの独立運動家が入りし、クラブのメンバーの中に彼らへの共感を育てたと思われる。^⑤ またこのクラブが結成された六〇年代はウィルクス運動の時代であるが、高潔ウィッグクラブの面々はウィルクス支援運動の一翼を担っていた。

一七七九年、ワイヴィルがヨークシャで政治改革を求める州集会を開催すると、イギリス各地で同様の主旨の州集会が次々と開かれ、ヨークシャ運動と呼ばれる全国的な政治改革運動が始まる。^⑥ ロンドンでも、ワイヴィル同様フェザーズ・タヴァーン誓願署名者で今は非国教徒となったリンゼイやジェブ、ロフト、ディズニ、その他ジョン・カートライトが中心となって、憲法情報協会 Society for Constitutional Information (SCI) が結成され、これが八〇年のウェストミンスター集会の急進的議会改革要求決議に指導的役割を果たしたのである。^⑦

また俗人非国教徒によって結成された圧力団体的な組織として、新教非国教徒委員会 Protestant Dissenting Deputies (PDD) がある。^⑧ これは一七三二年非国教徒の分裂がまだ明確でない時に作られ、ロンドン近郊の旧非国教徒三会派の会衆が代表を送っていた。一八世紀前半この組織の指導者は長老派に占められていたが、世紀末になるとその地位はそのままユニテリアンに引き継がれた。中でも、一八〇五年から三二年の長きにわたって議長を務めたウィリアム・スミス^⑨の影響は大きかった。PDD は非国教徒の政治的・社会的地位の保護と改善を目的として、主として審査法・自治体法廃止要求の活動を行っていた。しかし下院議員であったスミスはこの問題だけでなく、議会改革、奴隷貿易廃止等の自由主義的

改革全てを支持して活動した。特に最後の懸案においては、福音主義のクラバム・セクトのウィリアム・ウィルバーフォースなども密に連絡をもち、その達成に努力したのである。^④

このように、一七六〇—一八〇年代合理主義的非国教徒はロンドンを中心として急進主義の政治改革運動に積極的に参加していたのである。それでは政治的に顕著な存在となってきた彼らに對し、当時の政治家はどのような態度をとっていたのであろうか。

（三）一八世紀後半の政治家と合理主義的非国教徒

出版活動などを通してすでに高名となっていた合理主義的非国教徒の指導者達は、新思想に理解ある政治家の関心を引き付けた。この代表的な人物はシュルバーン伯である。伯はブライスの著作を読んで深い感銘を受け、六九年にブライス邸を訪問する。以来二人の交友は生涯続いた。^⑤シュルバーン伯は自身が組閣した一七八二年にはブライスを自分の秘書官として誘い、またブライスの推薦でプリーストリを司書兼家庭教師として雇い入れてもいる。また、彼はリンゼイの教会の常連でもあった。^⑥

しかしシュルバーン伯は彼らの宗教思想に共感はしても、その政治思想に對しては態度を保留していたように思われる。プリーストリとの関係も円満ではあったが、それはおそらく両者の用心のたまものであった。^⑦またブライスが国債の乱発を批判するパンフレットを出版した時、シュルバーン伯はそれを思いとどまらせようとした。^⑧アメリカとの講和は伯の手でなされたけれども、これが累積国債の面からも戦争続行に反対していたブライスの提言を受け入れた上での判断であったかどうかは疑わしい。

一七八〇年代まで、ユニテリアン達は穩健な議會改革に理解がありまた奴隸貿易廃止にも積極的であったピットに期待を寄せていた。特にフォックス・ノース連合後の一七八四年の総選挙では、非国教徒はピット派に全面的な支持を与えた。^⑨

しかしピットはカトリック解放論者ではあったが、非国教徒への審査を廃止することには消極的だったように思われる。結局彼は一七八九年五月時点で、審査法・自治体法廃止動議に反対票を投じた。^⑮その後フランス革命が勃発し彼が更に保守化したことは、周知の通りである。

逆にこのころ急速に非国教徒へ歩みより始めたのは、C・J・フォックスであった。過去一二年父のポケット・バラの選挙区から出馬していた彼は、一七八〇年ジョン・ウィルクスを含む選挙民の要望のもとに、イギリス最大の選挙区ウェストミンスターに移ったのである。^⑯以来フォックスは、この九千人の有権者を抱える選挙区から選出され、「人民の人 Man of the People」と呼ばれることに強い誇りを抱きつづける。しかしこの選挙区から選出されるためには、当地で活躍中の急進主義者への支持が絶対条件であった。こうしてフォックスは、ウェストミンスター集会決議を指導していた合理主義的非国教徒のS C Iのメンバーや、ワイヴィルと知己となる。^⑰

八四年政敵ノースと連合した彼は選挙民にきわめて冷淡に扱われる。同年二月の選挙民との会合では、フォックスは圧倒的な野次に迎えられ、汚物入りの袋を投げつけられまでした。結局フォックスはこの年、その後の生涯でただ一度だけウェストミンスターからの出馬を諦めたのであった。^⑱

この年非国教徒の票を大量に失ったことは、その後のフォックスに教訓となっただろうか。彼は一七八九年一月、フィッツウィリアム伯への手紙の中でこう述べている。

「私はあなたが、私が政権にいれば熱心に支持するつもりのないような動議を、今の立場で提出するべきでないとお考えなのはよく解っています。(中略)私の意見は、彼らの主張故に彼らを支持することが正しいというだけでなく、お返しとして総選挙で非常に重要な支持を獲得する可能性があるということなのです。」^⑲

フィッツウィリアムが問題としていたのは、八九年からのフォックスの審査法・自治体法廃止キャンペーンである。八四年の経験から何を学んだにせよ、フォックスは八〇年代後半から非国教徒支持を明確にした。彼は、ロンドンの非国教

徒の夕食会にしばしば出席するようになり、援助を約束する乾杯の辞を行った。そして八七、八九年の両法廃止動議に賛成投票をし、九〇年には自らこの動議を提出したのである。^⑤

このフォックスとウェストミンスターの選挙民の逸話は、大きな選挙区に限ってみれば一八世紀後半には政治家が選挙民の意向に従わざるを得なくなっていたことを示している。つまり大選挙区の選挙民のつくる政治団体は圧力団体として立派に機能していた。このような時代に選挙権を有ししかも非常に政治的関心の高かった合理主義的非国教徒は、相当の政治力を発揮し得たと判断してよいのではないだろうか。

フランス革命が過激な展開を見せ始めた九〇年代になると、イギリスの世論は急速に保守化する。政界の左派勢力であった旧ロッキンガム派ウィッグでさえ同様であり、この中でフランス革命賛美と政治改革支持の姿勢を変えないフォックス派はバークらと袂を分かった。この結果フォックスとその後継者は少数派となり、一八〇六年の挙国一致内閣の短い合間を除いてこの後四〇年近くを野党として過ごすこととなる。この間、議会改革や奴隷貿易廃止、宗教上の自由拡大などの一八世紀のイギリスの自由主義改革の議題は完全に凍結され、一九世紀まで持ち越されることとなる。

他方大半のユニテリアンも、やはり革命支持と改革支持の姿勢を変えなかった。この結果彼らは時代の犠牲になり、当局の検閲や拘置、投獄等の措置を受け、また愛国主義的群衆の攻撃対象となった。^⑥ 九一年ブリストリが焼打ちにあったバーミンガム暴動はこの中で最も有名である。

このように九〇年以降全ての改革路線は不人気となり、政界ではフォックス派、院外では多くのユニテリアンを含む急進主義者のみに支持されるだけとなった。しかしこの孤立的な状況故にフォックス派ウィッグとユニテリアンの絆はさらに深まったのではないかと思われる。従って次章では、この一七九〇年代から自由主義改革が達成されるまでの一八二〇年代の時期において、フォックス派と合理主義的非国教徒がどのような協力関係を築くに至ったかを調査しよう。

⑤ 以下の記述は、C. Gordon Bolam, *The English Presbyterians from*

Elizabethan Puritanism to Modern Unitarianism, Boston, 1968, に

多くを依拠している。

- ② 以下の議論で長老派という場合、イングランドの長老派のみを必ずしもスウェットランドの長老派は、むしろ正統派カルヴァニズムにとどまり福音主義の影響を強く受けた。

- ③ Bolam, *op. cit.*, p. 178.

- ④ 英国国教のアルミニウス主義的傾向については、小嶋潤『イギリス教会史』刀水書房、一九八八、一二六頁、浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店、一九八九(第二刷、一九八七年第一刷発行)、一三八頁を参照。

- ⑤ Bolam, *op. cit.*, pp. 182.

- ⑥ Samuel Bourn の教理問答 *Ibid.*, p. 184.

- ⑦ Bourn 同様、同様の文通相手であったアルミニウス派牧師 John Taylor の言葉 *Ibid.*, p. 185.

- ⑧ Seed, *op. cit.*, p. 301.

- ⑨ Bolam, *op. cit.*, p. 190.

- ⑩ *Ibid.*, pp. 180, 204.

- ⑪ *Ibid.*, pp. 191, 194. こうしたアカデミーの「ロンドン・アカデミー」ではニートンの友人ジョン・イネメス John Eames がカリキュラム作成に携わる。ブライスはこの学校で一八才から二〇才までを過ごし、イネメスを尊敬していた。また王立協会会員であったブラインズはニートン全集の編纂を依頼された。 William Morgan, *Memoirs of the Life of the Rev. Richard Price*, London 1815.

- ⑫ Bolam, *op. cit.*, p. 209.

- ⑬ Seed, *op. cit.*, p. 312.

- ⑭ Bolam, *op. cit.*, p. 230. ブリーストリーは「合理主義的非国教徒と呼ばれている人々の集団が、正確にユニテリアンであらうとなかう」と一般的に減少していることは余りに明らかで否定できない。」と八三年

に及び。

- ⑮ *Ibid.*, pp. 218, 221.

- ⑯ *Ibid.*, p. 199.

- ⑰ Seed, *op. cit.*, pp. 304, 309, 311.

- ⑱ ローレンス・ボナムの「ボナム」 Bolam, *op. cit.*, pp. 224-7.

- ⑲ John Taylor. 本章の註⑥の人物。

- ⑳ John Aikin (1713-1780). "John Aikin", *Dictionary of National Biography*, 1967-68 (1st Published 1885-1901). vol. 1, p. 185. (以下 DNB を記す)

- ㉑ Gilbert Wakefield (1756-1801). DNB 参照。

- ㉒ "John Aikin", DNB vol. 1, p. 185.

- ㉓ アンソニー・ガスコigneの広教会運動について Bolam, *op. cit.*, pp. 227-9. John Gascoigne, "Anglican Latitudinarianism and Political Radicalism in the Late Eighteenth Century", *History* 71 (1986).

- ㉔ Edmund Law (1703-87). Clark, *op. cit.*, pp. 311-2. ロスは理論的自由思想家 free thinker のサムエル・クラーク Samuel Clarke の思想的継承者である。クラークについては、浜林正夫「前掲書」一八四-一六頁。

- ㉕ Francis Blackburne (1705-1787). ロスのカレッジの友人。同じロースの影響を受けて。 *Ibid.*, p. 313.

- ㉖ Bolam, *op. cit.*, p. 228.

- ㉗ John Jebb (1736-86).

- ㉘ John Disney (1746-1816).

- ㉙ Capel Lofft (1751-1824). 以下同様に。 Clark, *op. cit.*, p. 312.

- ㉚ *Ibid.*, pp. 314-5.

- ⑬ Theophilus Lindsey (1723-1808). *Ibid.*, p. 315. リンゼイはケンブリッジのセント・ジョーンズ・カレッジ出身。彼とティズニはブラックバーンの崇拜者であっただけでなく、その義理の娘、実の娘とそれぞれ結婚している。リンゼイは七三年、シェプとティズニは七五、八二年に、ウェイクフィールドを七九年国教の聖職録を辞している。ウェイクフィールドはこの結果、ワーリントンに職を求めたのである。
- ⑭ Bolam, *op. cit.*, pp. 228-9.
- ⑮ *Ibid.*, p. 229.
- ⑯ H. T. Dickinson, "Radicals and Reformers in the Age of Wilkes and Wyvill", Jeremy Black ed. *British Politics and Society from Walpole and Pitt*, p. 136. Clark, *op. cit.*, p. 320.
- ⑰ James Burgh (1714-1775). アンデン郊外の Stoke Newington の学校を経営。ヘーダの政治信念はジョージ・カトラ H. Hay, "The Making of a Radical: The Case of James Burgh", *Journal of British Studies* 18 (1979), pp. 90-117.
- ⑱ マンチのメンバーはジョージ・バーナード・クラーク、ロウ、ブラックバーンの崇拜者であった。
- ⑲ *Ibid.*, p. 338. ワイヴィルはサッチェル・クラーク、ロウ、ブラックバーンの崇拜者であった。
- ⑳ John Cartwright (1740-1824). クラークによれば理論者。軍人だが政治改革運動で高名となる。力織機の発明者エドモンドは彼の弟。ティズニの従兄弟である。DNB 参照。
- ㉑ Dickinson, *op. cit.*, p. 138.
- ㉒ A D D による Manning, *op. cit.*
- ㉓ William Smith (1756-1835). 彼のジョージ四世を参照。
- ㉔ Bolam, *op. cit.*, pp. 244-5.
- ㉕ W. Morgan, *op. cit.*
- ㉖ Bolam, *op. cit.*, p. 229.
- ㉗ "Joseph Priestley", DNB. プリーストリは七二年から伯の司書と子供達の家庭教師をしていたが、七八年以降二人にはおそらくは思想上の行き違いがあった。八〇年プリーストリはこの職を辞し、その後伯が誘った時には断っている。
- ㉘ W. Morgan, *op. cit.*
- ㉙ Clark, *op. cit.*, p. 340. 一七八四年選挙の非国教徒の動向について Phillips, *op. cit.*, pp. 147-8.
- ㉚ Clark, *op. cit.*, p. 342.
- ㉛ "C. J. Fox", in R. G. Thorne ed., *The History of Parliament. The House of Commons 1790-1820*, London, 1986, (以下 HC と略す。)
- ㉜ 一七八〇年二月のフォックスとウェストミンスターの選挙民の会合は当時このように観察されている。「先週の水曜、ウェストミンスター・ホールである会合が催された。チャールズ・フォックスが人々に断固たる熱心な弁舌を振ったのである。そして一つの誓願が議決されたばかりでなく、彼は次回の総選挙のその町の候補者として推薦され、それは喜ばし気に受け入れられたのである。ウィルクスは彼の熱烈な支持者であった。」L. G. Mitchell, *Charles James Fox*, Oxford, 1992, p. 35. (以下 C. J. Fox と略す。)
- ㉝ 一七六一年時点の人数。Sir Lewis Namier, *The Structure of Politics at the Accession of George III*, 2nd ed., London, 1961, p. 80.
- ㉞ C. J. Fox, p. 36. サッチェルはティズニ・カートライントと書いているが、これは明らかにジョーンの間違ひである。
- ㉟ *Ibid.*, pp. 69-70.
- ㊱ *Ibid.*, p. 247.

⑤5 *Ibid.*, p. 246.

⑤6 例えばウエイタフィールドは九九年から一八〇一年獄にあった。

Clark, *op. cit.*, p. 258.

四 ホランド・ハウスと合理主義的非国教徒

(一) ホランド・ハウス

一八〇六年のフォックスの死後は、彼の政治信念は甥でありまた崇拜者であった第三代ホランド卿に引き継がれた。この後フォックスは継承者達の間で改革支持の妥協なきチャンピオンとして神話化され、改革支持はフォックス家の家訓ともなっていた。

しかし元来フォックス家は伝統的なウィッグの家系ではなかった。^① けれどころか、C・J・フォックスの父ヘンリはキングズ・フレンズであった。だがC・J・フォックス自身はジョージ三世と不仲であり、父の死後はエドモンド・バークから強い影響を受けてロッキンガム派のウィッグとなった。

つまりフォックスはウィッグの新参者でその主流派に距離をおいていた。またフォックス家の屋敷ホランド・ハウスが、ヘンリ・フォックスが主計長官時代に着服した公金で購入されたものであることは周知の事実で、^③ それにもとづくフォックス家の爵位は誇り高いものではなかった。その上フォックスとホランド卿の私生活は乱脈であった。フォックスは長年花柳界の女性と同棲し、最終的には彼女を妻に迎えていた。^④ 甥のほうは、グラント・ツァーの途中で知り合った人妻と子をなし、長い離婚の交渉をへて結婚している。^⑤ この三代にわたる不行跡が彼らを社会的に孤立させ、一七九〇年以降のその政治的孤立を更に深いものにしたことは否定できないであろう。

彼らの政治キャリアも異常であった。フォックスが最も長く官職にあったのは、彼がウィッグになる以前のことであった。^⑥ 甥のホランド卿の場合は九〇年代に成人期を迎えたため、挙国一致内閣時を除いては全く官職を経験しないまま老年

期を迎えた。政治をノブレス・オブリジエとして強く意識していた彼らにとつては、数十年という長期にわたって野にあることは大変な苦痛であり、ゆえにピット派と国王への怨恨には実に激しいものがあつたようである。

ホランド卿とその野心ある妻は、この政治経験の空白を私的な政治サークルを作ることと埋めようとした。こうして彼らはその自宅、ホランド・ハウスを当時の野党の政治本部的存在に作り上げていったのである。ホランド卿夫妻はその長年の大陸暮らしの経験を元に、ホランド・ハウスをヨーロッパの著名なサロンのように仕立てた。そこには政治家の他外交官、そして当代一流の知識人、芸術家、文筆家が集められた。その夕食会名簿の中にはバイロン、スコット、マコーリー、マルサス、リカードやタレーラン等の名を見いだすことができる^⑧。

（二）フォックス家の政治見解

フォックスとホランド卿は多くの書簡や日記を残しており、これによってその政治信念や行動の軌跡をたどることができ^⑨。しかしこの膨大な史料のコレクションを直ちに分析することは不可能であり、これについては稿を改める必要がある。そこでここではリズリ・ミッチェルの研究に依拠しながら、それに筆者が現在までに扱うことのできた少量の史料の検討を加えた上で、彼らの政治見解をまとめてみよう。

ミッチェルによれば、フォックスとホランド卿が入閣を果たした一七八三年と一八〇六年の内閣が共にジョージ三世の圧力で瓦解したことが、両者の政治信念の原点であつた^⑩。彼らはこの体験をもとに、当時を王権が不当に拡大している時代と認識したのである。この判断は明らかに事実誤認であるが、フォックスとホランド卿がこの錯覚を出発点とした政治家であつたことは看過してはならない。

ホランド卿は、王権の伸張と、ジョージ三世の大量の授爵による貴族の倍増によって、国王・上院・下院三者のバランスが壊れてきていると考えていた。彼はこの三者の中では下院が優位すべきであると考え、これが「人々 people」の権

利を擁護する機能を果たさなければ、民主主義革命の危険が生じると論じた。そして国王大権拡大と急進主義という当時の政治的両極端を排除するためには、中道勢力であるウィッグが議会改革を強く支持し続けなければならないと主張したのである。

しかし「人々」の定義については彼は曖昧であった。ただ彼が選挙権拡大の対象を有産階級に限定していたことは、明らかである。彼は、「大衆は成熟した政治見解を形成するには余りに無教育で暇がなく、その結果その政治見解は支離滅裂で非合理であり、扇動されやすい」と見なしていた。^⑬従って政治参加の条件は、合理的判断を形成できる状況を作る財産所有であった。歴史の進展過程で有産者が増加するとするスコットランド啓蒙の理論を信じていたホランド卿は、財産所有者の歴史的増大にもなって選挙権拡大が必要となると考えていたのである。

だから彼は決して急進的な政治改革を支持していたわけではない。ホランド卿は多くの急進主義者と知己であったが、彼らに対する評価は総じて低い。ただ卿は、王権の拡大という危険に対抗する上で彼らを「潜在的同盟者」と見なしていた。彼は一八〇六年の十一月のグレイへの手紙でこう述べている。^⑭

「私はその不合理を笑いはしても、F・バーデット氏の政治学にどんな憤りも驚きも恐れも感じることも表明することもできない。彼やホーン・トックは明らかに閣僚に対するのと同様、いやそれ以上に我々に対する憎しみにつき動かされているのだから、閣僚達が彼に對し何か反対の手段をとれば、私はそれに最も活発に抵抗することを公共の自由と討論への義務と考えるのだ。(中略)宮廷の影響力は非常に邪悪であり、それこそがあらゆる危険の生じると懸念される場所なのである。」

一方個人の権利については、フォックスもホランド卿もずっと自由な見解を抱いていた。^⑮ホランド卿は公民権や信仰の自由は、全ての階級に生得の権利と考えていた。彼らはこのような自然権思想の観点にたつて奴隷貿易反対や非国教徒やカトリック教徒解放の論陣を張ったのである。

ただし奴隷問題については、フォックスの態度がきわめて明確だったのに対し、ホランド卿は曖昧さを残している。そ

れは、彼の主たる収入源が妻の財産であった西インドのプランテーションであったからだった。彼はこの結果奴隷貿易廃止と奴隷解放を分けて論じ、後者については基本的に賛成を示しながらも漸進的対処が望ましいとしている。奴隷貿易廃止については叔父同様明確で、これの達成を一八〇六年の挙国一致内閣の重要な成果として、誇りを持っていた。^⑩

フォックスは宗教についてはむしろ無関心、ホランド卿についても非国教徒の神学上の理論にどれほどの共感を持っていたかは解らない。^⑪ただしホランド卿と夫人は無神論者と噂されており、少なくとも理神論的な傾向にあったと思われる。また彼の従兄弟のランズダウン卿は、プリーストリを家庭教師に持ったユニテリアンであった。またヘンリ・ブルーム Henry Brougham、サミュエル・ロミリ、ジョン・アレンなどホランド・ハウスの常連の多くが無神論、あるいは理神論者であった。

フォックスにもホランド卿にも経済問題への貢献を見いだすことはできない。彼らは経済学にはほとんど関心がなかった。ホランド卿はスコットランド啓蒙の信奉者でありながら、アダム・スミス以下の古典経済学を全く理解していなかったといわれる。^⑫

ここで注意しておかなければならないが、ホランド・ハウスに関わりを持った人全てが、フォックス派に忠実だったわけではない。フォックス一家と深い交渉を持ちながらもビットヤリヴァプールと協力した人々として、カニングやランズダウン卿、パーマストンがいる。また一八二〇年代以降は、むしろこのような保守派のウィッグやリヴェラル・トリーが自由主義改革を積極的に支持するようになり、フォックス家が扱わなかった経済改革も彼らの手で進められる。

ホランド卿自身は、フォックス派ウィッグ自由主義改革支持という図式を生涯抱き続けた。しかしそれは以上にみたように、ごく限られた改革の議題、すなわち国内政治と外交の分野においてだけ実態のあるものであった。しかも、その中でも奴隷貿易廃止問題とカトリック解放は超党的な支持を得ていた議題であって、フォックス派に特別な貢献を読み取ることは難しい。また、一八二〇年代には彼らとは別個に改革派が台頭する。結局、フォックス派とその後継者の功績

は、一七九〇年代から一八一〇年代というイギリス世論の反動の時代に、宗教上の自由と議會改革を支持し続けたことに求められると思われる。

(三) キング・オブ・クラブズ King of Clubs

前節にも述べたようにホランド卿はスコットランド啓蒙の信奉者で、これによってフォックスの政治信念を科学的に裏付けしようとした。しかし彼自身はスコットランドに学んだことはない。彼とスコットランドの関係は、もっぱらロンドンの文学クラブのキング・オブ・クラブズで築かれたのである。

このクラブは、一七九八年二月のジェイムズ・マッキントッシュ家のパーティに始まり、一八二三年に消滅するまでに五二名の会員を集めた。最初のメンバーはロバート・バーシー・スミス、リチャード・シャープ、サミュエル・ロジャーズ、ジェームズ・スカーレット、ジョン・アレンであり、後には製陶業者のジョサイア・ウエッジウッド二世や銀行家のアレクサンダー・ベアリング、マルサス、リカード等も参加している。ホランド卿は、一七九九年一月にこのクラブの会員となっている。

キング・オブ・クラブズは、一八世紀末にエディンバラ大学に学んだ人々のロンドンにおける同窓会組織のような性格を帯びていたらしい。メンバーのうち、シドニー・スミス、ブルーム、フランシス・ホーナー Francis Horner、フランシス・ジェフリ Francis Jeffery、ランズダウン卿、ダドリ伯 J. W. Ward, Earl of Dudley、ジョン・アレン、ジェイムズ・マッキントッシュ、キネアード卿 Lord Kinnaird の九名は一七九〇年代のエディンバラ大学の学生で、ジョン・ブレイフエアは教授であった。しかも、シドニー・スミス、ブルーム、ホーナー、ジェフリ、ランズダウン卿、ダドリ伯、キネアード卿は、デュガルド・スチュアートの講義に共に出席した仲間であった。

スチュアートはアダム・スミスの自由貿易論の忠実な継承者であり、政治的にはウィッグを支持し、フランス革命の賛

美者でもあった。^⑤一七九〇年代社会が保守化すると、そのような政治思想だけでなく「自由貿易主義それ自体が革命的傾向とみなされ」るようになり、彼の講義や著作は幾度か最高民事裁判所の査察の対象となった。^⑥しかしその一方でスチュアートはシエルバーン伯のほか一部の政治家の支持を受け、ランズダウン卿やパーマストン等将来のウィッグの政治家を自宅に寄宿させていた。^⑦このシエルバーン家とのつながりから、スチュアートはホランド・ハウスにもしばしば招かれるようになる。

彼の学生だったシドニー・スミス、ブルーム、ホーナー、ジェフリ、ランズダウン卿、ダドリ伯、キネアード卿は、エディンバラの学生によって結成されていた討論クラブ、スペキュレイティヴ・ソサイエティ Speculative Society の会員でもあった。このクラブの会員には、他に小説家のウォルター・スコットや、ジョン・ラッセル卿、コックバーン伯 Henry Cockburn がいた。彼らが討議していた内容は、奴隷貿易廃止、審査法廃止、東インドに植民地を所有することが有用かどうか、下層階級を教育することの有用性、イングランドとの連合はスコットランドにとって有利かどうか、叙勲は世襲されるべきかどうかなど、高度に政治的であった。その上これに参加していた学生はスチュアートあるいは他のウィッグの教授の弟子で占められていたため、議論はともすれば体制批判に流れがちであり、結局トーリの教授からその渾身の扇動的言動を非難され、大学の評議会より今日的な政治課題を討議することを禁止されている。^⑧

スペキュレイティヴ・ソサイエティのメンバーの多くは、アカデミー・オブ・フィジックス Academy of Physics という別な学生クラブのメンバーでもあった。このクラブは一七九七—一八〇〇年の短期間継続したにすぎないけれども、エディンバラ・レヴューとの関連の上で無視できない。将来レヴューの中心的書き手となったスミス、ブルーム、ホーナー、ジェフリ、ジョン・ムレイ John Murray はこの会員であり、レヴューはこのクラブの派出物として位置づけられるからである。^⑨

このように、キング・オブ・クラブズはスコットランド啓蒙の中でも特に自由主義的な分子を集めていた。そして彼ら

はホランド卿を通してホランド・ハウスの常連となり、ここで政界進出のチャンスをつかんだ。特にエディンバラ・レビューは、この雑誌の愛読者であったホランド卿夫妻の厚遇を受けている。他方で、スコットランドの新思想はホランド・ハウスを窓口にも、ウィッグの政治思想に影響を与えていく。

しかし、キング・オブ・クラブズのメンバーには、もう一つのグループが存在した。これが、ロンドン、あるいは地方の産業都市在住の合理主義的非国教徒である。

(四) 合理主義的非国教徒とホランド・ハウス

キング・オブ・クラブズの五二名の会員のうち合理主義的非国教徒と確認できるのは、リチャード・シャープ、サミュエル・ロジャーズ、ウィリアム・スミス、サミュエル・ボディントン、ジョージ・フィリップスである。彼らはいずれも非常に富裕な貿易商、あるいは製造業者の子弟であり、しかもスミス、ロジャーズ、フィリップスの場合は早くから家業のスリーピング・パートナーとなり実際の業務には携わっていなかった。まさに彼らは有り余る余暇と財産を手にした「疑似ジェントルマン」であったのである。

この中でその宗教的傾向が最も明らかにできるのは、サミュエル・ボディントンである。彼の弟は、リチャード・プライスとその甥ジョージ・カドガン・モーガン George Cadogan Morgan が一七八七年に作ったハクニー・カレッジ Hackney College の学生であり、サミュエル自身はこのモーガンの個人的な教育を受け、この師とともにグラランド・ツァーに出かけている。このハクニー・カレッジは、プライスの母校のロンドン・アカデミーが正統派カルヴィニズムに傾いたため教育の場を失ったロンドン周辺の合理主義信仰の人々が、プライスに依頼して設立されたものであった。また、この学校は一七八六年に閉鎖されたワリントン・アカデミーの継承という面も持っている。ワリントンの化学の実験道具はハクニー・カレッジに受け継がれ、閉鎖時ワリントンの教官であったウェイクフィールドがここに移っているから

である。^⑤

以上と、それから後年彼が頻繁にロンドンのユニテリアン教会に通ったことからして、彼はプライスの流れをくむ合理主義的非国教徒であったと推量できる。また、シャープとフィリップスは彼の経営した西インド商会のパートナーであり、彼らもユニテリアンであった。

ロジャーズはボディントンが少年期に通ったデイセンティング・アカデミー出身である。また彼に個人的な指導を授けた大きな影響を与えたジェームズ・バーグは、プライス、プリーストリとともに高傑ウィッグクラブに所属し、政治改革についてのパンフレットを出版するなどした急進主義的非国教徒の一人であった。^⑥ またロジャーズは一八〇〇年には獄中のウエイクフィールドを訪問している。^⑦ このような環境からみて、彼もボディントンやシャープ同様ロンドン近郊のユニテリアンのグループに所属していたと考えられる。

彼らがフォックス派の政治路線を支持していた点は明らかだが、その政治見解の詳細は史料がほとんどないため把握することはできない。ボディントンとウィリアム・スミスの場合、PDDの指導的メンバーであったことが解るのみである。スミスについては前述した。ボディントン家の場合は、サミュエル自身は加わっていないが、彼の父と叔父はエンフィールドの非国教徒の代表としてPDDのメンバーであり、特に叔父は一七九三年から一八〇五年その収入役を務めている。^⑧

マンチェスタの大規模な綿業資本家であったフィリップスの場合は、この商業都市の利害の代弁者としての性格を、フォックス派としてのそれより明瞭に持っていたように思われる。彼は下院議員としてはマンチェスタ選挙区設置の要求を掲げ、またその綿業資本の利害のため綿花の輸入関税や穀物法に反対を表明した。^⑨ しかし、一八一九年マンチェスタで起きた暴動鎮圧の際に生じた殺りくに関して彼がシャープにあてた手紙では、「騎兵隊が彼らの間に突進した時、人々は平和的で暴動の明らかな兆しはなかった。（中略）私は、もし人々が演説を許され、決議を通すことを許されていたなら、

平和は壊されなかっただろうと確信している。」とあり、フィリップスがむしろ暴徒の側にたち、政府の介入を不手際かつ残酷であるとして非難していることが解る。なお、シャープは「一人の良きウィッグが、しかもマンチェスタを飲み込むほど多くを持っている男が、この処置をどう考えているか知ることを、あなたは無駄とは思いいならないでしょう」というメモと共に、この手紙をホランド卿に送っている。^⑤

シャープも一時下院議員であったが、その政治活動はめだたないものであった。しかし彼は若き日々にはS C Iのメンバーであり、まさに非国教徒急進派の主流に身をおいていた。ここで彼はブリストリやホーン・トック等の急進主義者、グレイ等の政治家に出会っていた。一七八八年にはここでマッキントッシュにも会い、これが強い友情に発展した結果、シャープはキングズ・オブ・クラブズの設立メンバーとなった。^⑥

一七九二年からシャープと親しかったロジャーズも、同様に急進派の知識人の中に身をおいていた。彼はフランシス・バーデットと早くから親交を持ち、選挙においてはサミュエル・ロミリ、ホーン・トックに投票している。^⑦

シャープの例にみるように、思想を同じくするロンドン在住のエディンバラ大学出身の若者と合理主義的非国教徒は、S C Iのような急進主義的な政治クラブで知り合い、その結果極めて自然に両者はキングズ・オブ・クラブズで同席した。そして合理主義的非国教徒もまた、このクラブを通してホランド・ハウスの客人となる。

ホランド卿は彼らに対しても、スコットランドの若者達に対するのと同様の政治的支援を与えた。一八〇六年の総選挙時、卿はジョージ・ティアニを通してボディントンとシャープに幾つかの購入可能なポケット・バラを提示している。シャープは最初別な人物に頼ってシーフォード Seaford 選挙区で選挙活動をしていたが失敗に終わり、その結果ホランド卿とティアニの世話により、別な選挙区を四〇〇〇ポンドで購入し議席を獲得した。彼はその後礼状をホランド卿夫妻に送っている。^⑧ボディントンのほうはロチェスターで失敗した後、ホランド卿からミルバーン・ポート Milborne Port を紹介されている。しかし彼の場合はここでも成功せず、翌年別な議席を購入しなおし、同年の内閣の瓦解まで数ヶ月間の短

い下院議員の生活を送ったのだった。^⑤

しかも、ホランド卿と彼らは政治上の支援関係にとどまっていなかった。クラブでの出会いを始まりとする両者の関係は、最初から極めてプライベートな色彩を帯びていたのである。特に「座談家シャープ」としてロンドンのいろいろなクラブで人気のあったシャープと、詩人として早くから名声のあったロジャーズは、ホランド・ハウスに出入りし始めるやいなやその個人的才能を買われて常連となっている。特にロジャーズとフォックスは非常に親しかった。

しかし、彼らとホランド卿夫妻との間に完全に対等の友情が育ったわけではなかったようだ。例えば当時ホランド・ハウスを題材に書かれた風刺小説では、^⑥ロジャーズとシャープは宮廷の廷臣か道化師のように描かれている。実際ホランド卿夫人とシャープの間に残された書簡には、一八〇二年のアミアンの平和直後の卿夫妻のバリ行に際して、先にバリにおもむいて彼らの宿搜しに奔走するシャープの姿がある。^⑦

ホランド卿とサミュエル・ボディントンの場合は以下のようなものである。ボディントンは一八〇四年の暮れにキング・オブ・クラブズの会員となるが、当時卿はスペインに滞在中で、二人が初めて出会ったのは卿が帰国した一八〇五年春以降だったはずである。ホランド・ハウスの夕食会名簿によると、ボディントンがホランド・ハウスに初めて招かれたのは一八〇六年の十一月一六日で、^⑧この日付から、ボディントンの下院への立候補とそれへの卿の支援が両者の交流を進展させたらしいと判断できる。

だが、その後もボディントンはホランド卿夫妻の関係はそれほど深いものではなく、年に一、二回の訪問という程度であった。^⑨ところが、ホランド卿夫人と前夫との間の子であったヘンリ・ウェブスタとボディントンの一人娘が結婚したことで、ボディントンは卿の姻戚となり、両家は急速に接近する。

ただしボディントンは長くこの結婚に反対していた。二人の恋愛は少なくとも一八二〇年の一二月には始まっているが、^⑩結婚が成立したのは二四年一〇月であった。ボディントンの反対理由は、彼の娘が仲介を求めてホランド卿に出した手紙

の中で、明確に述べられている。これによるとボディントンは、ウェブスタがほとんど資産を持たないことに加え、過去の身持ちの悪さと軍歴以外に職業を持たないことを問題視していた（軍人は彼の最も嫌う職業であった）。結局彼は、ウェブスタが財産目当てに娘に近づいたのではないかという危惧の念を死ぬまで捨てることができなかったのである。

一方ホランド卿夫妻はこの結婚に基本的に賛成していたようである。夫人は息子ヘンリ・フォックスへの手紙の中で、「ボディントン老はいまだに反対しているが、ヘンリ（ウェブスタ）とグレイス（ボディントンの娘）には貧乏はふさわしくない」と述べている。⑤ 当時彼女の西インドでの財産がほとんど無価値となっており、彼女には息子を助ける経済力がなかったことを考えれば、卿夫妻にこの結婚に反対する理由はなかった。グレイス・ボディントンの手紙を受け取った後、卿が実際にボディントン説得に乗り出したかどうかは解らないが、いずれにしてもこの直後ボディントンは折れたらしく、手紙の翌月に二人はボディントンと卿夫妻の出席のもとに挙式したのである。⑥

しかしボディントンは、その遺産のうち商会とそれに属するものを甥に譲り、残りの私的な財産を娘と、限定相続によってその子ども達に送り、婿には五〇〇ポンドと年二〇〇ポンドの年金しか遺贈しなかった。そして孫の相続にも、彼らが軍人にならないことという条件をつけている。⑦

これらが示すように、ボディントンの婿に対する気持ちは暖かいものであったとは思われない。しかし一方で、この婚姻はホランド卿一家とその親戚の中でのボディントンの地位を堅固なものにしている。彼はこの後以前よりも頻繁にホランド・ハウスを訪れたばかりでなく、卿の姉妹や卿夫人の母とも交流を持つに至っている。

ここに合理主義的非国教徒の例として挙げた人物は歴史的には無名に近い人々であり、彼らについてこれ以上詳細な事実を収集することは不可能に近い。そこでここでひとまず調査は中断し、現在までに知り得ることのできた事実から合理主義的非国教徒の政治行動のあり方について結論を導くこととする。

まず、ホランド卿と合理主義的非国教徒の出会い、ロンドンの急進主義的あるいは自由主義的な政治・文学クラブを

舞台としていた。これは両者が同じ様な政治的傾向を帯びていたことを示している。また、前節にみたように両者は合理主義信仰という点で宗教的にも似た立場であった。もちろん両者の政治・宗教上の見解の詳細は、おそらくはなかなか離れていたに違いない。しかし彼らが交流を持った時代は、体制批判的な傾向が政治においても宗教においても非常に忌避された時代であり、それ故にそのような傾向を持つ人々は多少の思想の違いを越えて密接なつながりを形成したのだと思われる。

出会った後の両者の関係は、やはり第一には有権者と政治家のそれであった。前者は政界進出を望み、後者は支援を期待した。しかしホランド卿の代には、両者の関係は私的な要素が強化され、合理主義的非国教徒は友人としてさらには姻戚として受け入れられた。

① Leslie G. Mitchell, *Holland House*, London, 1980, pp. 11-13.
(以下 *H. H.* と略す。)

② C. J. Fox, p. 34.

③ ケンリ・フォックスの公金着服は以下に詳し。L. Namier, *op. cit.*, pp. 181-2.

④ C. J. フォックスの妻は Mrs. Armistead。彼は彼女と一一年間同棲した後に結婚している。この時代においては内妻を持つこと自体はウィッグのサークルでは許されていたが、そうした女性との正式な結婚は公認されるものではなく、このためフォックスはこの結婚を七年にわたって隠し続けた。C. J. Fox, p. 180.

⑤ “Fox, Elizabeth Vassall”, *DNB* vol. 7, pp. 555-7. この結婚のいきさつについては、拙稿「ロンドン商人の社会的上昇——ボディントン家の場合——」『西洋史学』一六五、一九九二年二頁に簡単に示した。

⑥ C. J. Fox, p. 19.

⑦ フォックス家はこの点を非常に意識していた。このためホランド卿夫妻は息子達の政界入りを強く希望したが、政治本部化した家に育った彼らはかえってこれに反発し、別のキャリアを選んだ。この結果ホランド卿夫人は、その財産の主なもの息子にはなく彼らの政治上の後継者ラッセル卿に残っている。*H. H.*, pp. 28-9.

⑧ ホランド・ハウスの客人達については、註⑤に説明するホランド・ハウス文書の中に納められている夕食会名簿から知ることができ、またこの常連であったサミュエル・ボディントンの日記からも調べられる。ボディントンの日記については註④を参照。

⑨ ホランド・ハウス文書は、大英図書館の手書原稿部門に納められている。これは一六世紀から二〇世紀までのフォックス家の書簡、手記等の九三七巻に及ぶコレクションであり、このうち四三八巻が第三代ホランド卿夫妻に関する。各巻には二百葉程度の手書原稿が納められている。このうち今回を通してものの分類番号だけを以下に示す。

Holland House Papers, British Library Add 51573, 51584, 51591,

51593, 51807.

¹⁰ Leslie Mitchell, *H. H. C. J. Fox*.

¹¹ *H. H.*, pp. 43-4, 61-2.

¹² *Ibid.*, p. 61.

¹³ *Ibid.*, p. 64.

¹⁴ Anand C. Chitnis, *The Scottish Enlightenment and Early Victorian English Society*, London, 1986, p. 86.

¹⁵ *H. H.*, p. 74 ff.

¹⁶ Francis Burdett (1770-1844) 彼は旧家の従男爵の三男であり、また銀行家の娘と結婚して非常に富裕であったが、急進主義者として知られる。DNB, vol. 3, HC, vol. 3.

¹⁷ John Horne Tooke (1736-1812). 一七六〇年代ウィルトクス運動に活躍した急進主義者。そのウィルトクス。DNB, vol. 19, HC, vol. 4.

¹⁸ *H. H.*, p. 80 ff.

¹⁹ *Ibid.*, p. 89 ff.

²⁰ クラークは夫妻を無神論と断定しているが、ホランド卿夫人の日記の編者イルチェスタ伯は、ジョン・アレン(註²³参照)が夫人の前で彼の神格の否定の信念を口にするると夫人は常にそれを非難したとしてゐる。Clark, *op. cit.*, p. 358. Earl of Ilchester ed. *The Journal of Elizabeth Lady Holland (1791-1811)*, London, 1946, p. 19.

²¹ Lord Lansdowne, Henry Petty-Fitzmaurice (1780-1863). このヘベーン伯の息子。ホランド卿の従兄弟。

²² Samuel Romilly (1757-1818). ロンドンに宝石商の息子。法廷弁護士 DNB, vol. 17.

²³ John Allen (1771-1843). エディンバラ大卒業後ホランド卿付きの医師として雇われ、その後ホランド・ハウスの司書兼政治的アドバイザーとしてこの館で一生涯を過ごした。彼は、大学の友人をホランド・

ハウスに紹介することに努めた。エディンバラ・レビュー。

²⁴ *H. H.*, p. 188.

²⁵ カニングはホランド卿のオックスフォード時代の親友であり、卿は学生時代彼の自由主義的な政治見解に深い感銘を受けていた。このため卒業後まもなくカニングがビクトリア内閣に入ったことは、卿にとって衝撃であった。H. H., pp. 126-7.

²⁶ James Mackintosh (1765-1832). 医学博士。法廷弁護士。エディンバラ・レビューにも参加。彼の二人の姉妹はジョサイア・ジョン・ウエッジウッド兄弟と結婚した。また彼は、同様にウエッジウッド家の姻戚であったフレンの姉妹と結婚した。DNB, vol. 12. Patrick O'Leary, *Sir James Mackintosh. The Whig Cicero*, Aberdeen, 1989.

²⁷ クラブの会員リストは以下を参照。W. P. Courtney, "The King of Clubs", in Lady Elizabeth Seymour, *The Pope of Holland House*, London, 1906, pp. 333-340.

²⁸ Robert Percy Smith (1770-1845). ロンドン商人の子弟であり、イートン・ケンブリッジに学ぶ。後下院議員。

²⁹ Richard Sharp (1759-1835). ロンドンの帽子製造業者の子弟。ボタニントン商会の共同経営者の一人。DNB, vol. 17, HC, vol. 5.

³⁰ Samuel Rogers (1763-1855). ロンドンの銀行家。詩人。彼は1794年 DNB, vol. 17, R. E. Roberts, *Samuel Rogers and his Circle*, 1910.

³¹ James Scarlett (1769-1844). 1st Baron of Abinger.

³² Chitnis, *op. cit.*, p. 83.

³³ Sydney Smith (1771-1845). ロバート・ペーシーの兄弟。国教会牧師。

³⁴ John Playfair (1748-1819). 数学の教授。エディンバラ・レビューに二〇余りの論文を投稿している。

五 おわりに

以上で、一七九〇年から一八二〇年代における合理主義的非国教徒と野党の政治家とのつながりがある程度検証されたかと思う。

本稿で明らかにされた合理主義的非国教徒と政界の自由主義的勢力との密接な人的結合は、ヘテロドクシの人々が政治改革支持の態度を常に維持していたこと、またその宗教、政治上の信念を実際に政府に反映し得る立場を獲得していたことを実証した。このような状況の存在は、一時的にもせよ合理主義的非国教徒がイギリス政治史上重要性を持ったことを物語っている。

その点で本稿は、イギリスの体制批判の思想の潮流でヘテロドクシに重要性を見いだそうとするクラーク説を肯定する。ただし、合理主義的非国教徒が積極的に関わったのは、一八世紀的な政治課題の解決、すなわち対アメリカあるいはフランス戦反対、奴隷貿易廃止、宗教的自由の獲得、腐敗選挙区廃止に代表される穏健な議会改革に限られていたことは留意しなければならない。またこれらの課題の解決された一八三〇年代以後は、フランス革命中は急進主義と目された彼らも、決して急進主義的改革を望まなくなっていた。そもそもこの後ユニテリアニズムはより下層の人々を対象に布教活動を開始し、また一九世紀のロマン主義の思想的潮流の中で合理主義的な姿勢を失っていく。この結果、本稿で問題にしたような思想的社会的立場を持った合理主義的非国教徒というものが、この後は消滅するように思われるのである。

従って、この合理主義的非国教徒が急進主義思想と関係を持ったのは一七九〇—一八一〇年代という時期に限られる。この時期、イギリスの世論は反動化し、かつてリベラルであった多くの人々が改革に背を向けた。この反動の時期にあった改革の思想を継承し次代に伝えたことが、合理主義的非国教徒とホランド・ハウスの政治家達の存在意義であったので

はないだろうか。

本論は人的な結合関係だけを明らかにしたものであり、これだけでは合理主義信仰と政治改革思想の関係、またそれらが実際の政治の動きにどれほど反映し得たかは不明なままである。しかし、このような問題はここに登場した多くの人々の思想や信仰の詳細な分析の後にこそ明らかになる。幸い本稿に提示したように史料は豊富であるので、稿を改めながら調査を進めることとしたい。

（京都府立大学女子短期大学部講師

）

Whigs and Dissenters : Guests of Holland House

by

KAWAWAKE Keiko

In recent years the study of religion in the field of British politics and society has been gaining popularity. In particular, the political behavior of dissenters is a big topic. Their prominence in the campaign for parliamentary reform and the movement against the American war has attracted many researchers' attention.

On the other hand, however, there are those who question the significance of dissenters in political radicalism. For example, Roy Porter says "their zeal for socio-political reform should not be exaggerated" and "not till the 1780s, and then only among a hothead minority, did Nonconformity show a potential for political radicalism." John Brewer argues that the only dissenters involved in the cause of liberty were the ones in the small circle associated with Price or Priestley. Critics like them seem to conclude that the "hothead minority" or the small circle of Price or Priestley did not contribute much to eighteenth-century radicalism.

We must admit that such a group as they mention, which we can call "rational dissenters", was small and growing smaller. However most of the rational dissenters were rich merchants or manufacturers and some times held dominant powers in local society. Besides, they were electors. Their religious circumstances gave them no alternative but to support the Whigs. Their vote became essential for the Whigs from the late eighteenth century, particularly for the Foxites after the French Revolution.

In this essay, the author investigates some rational dissenters whose names are listed in the dining books of Holland House. The relationship between them and Lord Holland tells us that rational dissenters built strong connections among the Whig circle and could exert direct influence on the Establishment.